

国語

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

平成31年度大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）は、平成25年度入学生から実施された高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）を踏まえた試験であった。学習指導要領では、総合的な言語能力を育成する「国語総合」を共通必修科目とし、高等学校「国語」において指導する内容の共通性を重視している。

高等学校「国語」教科担当としての立場から、本年度の試験問題を検討した。検討を加える観点として次の5点を設定した。

- (1) 学習指導要領の目標・内容等に沿った問題（素材文・設問）であったか。
- (2) 高等学校における授業や学習活動の実態に配慮がなされた問題であったか。
- (3) 受験者の基礎的・基本的な国語力を幅広く総合的に判定し得る問題であったか。
- (4) 素材文は「国語総合」の教科書で扱われる程度のものであり、高校生が読むのにふさわしく、魅力的なものであったか。
- (5) 設問は、内容・形式・選択肢などによく検討が加えられ、受験者の読解・思考過程を想定するなどの配慮がなされていたか。

以上の観点に立ち、「試験問題の内容・範囲等」「試験問題の分量・程度等」「試験問題の表現・形式等」の面から、第1問～第4問それぞれに検討を加えて、評価し意見を述べる。

2 試験問題の内容・範囲等

第1問 沼野充義『翻訳をめぐる七つの非実践的な断章』からの出題。翻訳は可能という楽天的な考え方と、不可能とする悲観的な考え方で揺れ動く筆者が、原作と読者とを媒介する訳者との関係性の中で、「正確」な翻訳とは何かということについて述べた文章である。平易な文章ではあるが、論理的思考力や文章読解力を確認する上で適切な素材文であった。

問1 全て常用漢字であり、基本的な漢字・熟語を問う設問として妥当であった。

問2 1～4の文脈を的確に押さえているかを問う設問である。翻訳家とはみな楽道家だという喩えと「その意味では」という指示内容の理解を問う平易な設問である。

問3 傍線部の理由説明を求めることにより、10～12も踏まえ、5～9の文脈の理解を問う設問である。自然さを重視しすぎる近似的な言い換えは、厳密な翻訳ではなく翻訳を回避しているのではないかという筆者の問題意識を理解し、本文を読み取ることが求められている。

問4 傍線部から筆者の翻訳についての考え方を読み取る設問である。10～12の子供の時の筆者や13～15の女子学生と、翻訳者との翻訳に対する考え方の違いを対比的に捉えることで、正答へとたどり着く。

問5 5人の生徒による対話から本文の趣旨と異なる発言を選ぶ設問である。話者の集団が成熟していれば、生徒Bの誤った認識を他の生徒が修正する展開になるはずで、対話形式の問いは昨年度の本試験、問3の設問形式の方が妥当であると感じた。

問6 (i) 本文の表現について適当でないものを選ぶ設問である。表現の設問は基本的に、a

本文から抜き出した表現、b 筆者が用いた修辞技法、c 読者に与える効果の三つの要素からなっている。③を適当とするのに根拠が乏しいと感じた。しかしながら、④は、もし20年後の自分が翻訳に四苦八苦することを聞かされたらと仮定する文脈なので、cの要素が少年時代を懐かしんでいないと解釈でき、④は適当でないものと判断できる。

(ii) 本文の構成について適当なものを選ぶ設問である。問3や問5と重なるが、学習指導要領に沿っており、問う意義はある。

第2問 上林暁の短編小説『花の精』からの出題。小説全文ではなく一節を切り取る形での出題であった。戦前の東京近郊の庶民の暮らしぶりが描かれていた。人物相互の関係が捉えやすいため、受験者にとっては読みやすいものであったと思われる。「私」についての「月見草」に関する心境を理解するには丹念な読み取りが必要である。

問1 基本的な語句の意味を問う設問である。(ウ)の「目を見張っていた」は、文脈のみで意味を判断し誤答を選んだ受験者が多かったと思われる。

問2 「私」の心情を問う設問である。リード文も踏まえ、「私」と「妹」の人物相互の関係をよく理解した上で、傍線部より前の内容との照合を行うという、小説読解の基本的な力を見るのに適した設問である。

問3 「私」の心情の理由を説明する設問である。66行目までの「O君」とのエピソードの内容を丹念に読み取ることで正答を選ぶことができる。⑤の「月見草への自分の思いをO君が理解してくれていたと思わせる」の根拠としては、傍線部直後の「私も思い切って大きなやつを引けばよかった」と思っていることだと判断できる。他の選択肢との吟味に時間が必要な設問であったが、全体の解答時間に支障が出るほどではなかったと思われる。

問4 「私」の心情を問う設問である。本文の表現をもとに登場人物の心情を推察するという、日頃の授業における学習活動を意識した適切な設問である。

問5 「私」の心の動きを問う設問である。「まるで花の天国のようであった」という比喩表現に注意するとともに、「私」についての月見草が持っている作中における特別な意味を考える必要がある。文学的な文章における人物の心情を反映した情景を読み取る力を見る良問である。

問6 文章の表現に関する説明として「適当なもの」を六つの選択肢から二つ選ぶ設問である。比喩表現を扱っている正答の⑥は比較的容易に判断できる。もう一つの正答の④は、60行目で「蕾はまだ綻びていない」とあるが109行目で「まだ蕾を閉じていた花々が、早やぽっかりと開いていた」と記述されていることと関連付けるとよい。

第3問 室町時代成立の御伽草子『玉水物語』からの出題。姫君を見初めた狐が、男ではなく美しい女に姿を変えて、そばにいられるようにするという展開が面白い。リード文もあり、異類恋愛物であることに早くから気付けば、登場人物も限られ読みやすかったものと思われる。

問1 語句の解釈を問う設問である。敬語も含め、基本的な古典単語の知識があれば迷わない。(イ)は「ばや」との呼応によって願望を表すという知識の有無で差がついたと思われる。

問2 敬意の方向を問う設問である。敬語の基本的な知識があれば、cまでで正答が導ける。

問1(ア)も含め、敬語の知識は必須である。

問3 狐の心情を問う設問である。傍線部を含む一文を解釈すると正答へとたどり着く。「いたづらに」「消え失せ」などの日頃の基本的な古典単語の学習の成果が問われた。

問4 傍線部に現れた娘の態度から、娘の思いを問う設問である。そもそも狐が何のために娘に化けたのかということ踏まえて、傍線部の前後を丁寧に解釈すると正答へとたどり着く。

問5 傍線部を設けず、本文全体から狐が娘に化けた理由を探させる設問である。根拠は6行

目から7行目にかけて明示されているが、問4の傍線部Bから大分遡らなければならず、手間取る受験者がいたかもしれない。問6とセットで本文全体の内容理解を確認する意図を感じた。正答の①の「せめて」の係り受けが分かりにくかった。

問6 この問いも傍線部を設けず、姫君との関係で玉水がどのような姿で描かれているかを問う設問である。解答の根拠は、終盤の姫君と玉水とのやり取りから読み取れる。

第4問 清の仇兆鰲（きゅうちょうごう）の『杜詩詳註』からの出題。本文は、学校現場でよく取り上げられている唐代の詩人杜甫のエピソードである。会話形式で展開する漢文については、授業でも学習する機会が多いため、取り組みやすかったと思われる。注釈も妥当であり読解の助けとなった。

問1 語の意味を問う設問である。基本的な語彙の知識を問う設問であった。

問2 人物の状況を説明する設問である。直前にある注4がヒントとなっている。人物相互の関係を読み取る力を反映できる良問であった。

問3 傍線部に込められた心情に至った理由を説明する設問である。傍線部直前のある人の問いに対する答えであることから、決して過剰な孝行ではないという意味合いの選択肢が妥当だと判断できる。また、傍線部直後の表現から、叔母に報いる思いであることが分かる。

問4 書き下し文と解釈を問う設問である。[解釈]の全ての選択肢にある「運気が良くなります」という記述をヒントに、叔母がどうしたのかを考えることになる。傍線部直後の表現から、叔母の子と杜甫との「地」(寝場所)を変えたことが分かる。

問5 傍線部の内容説明の問題である。重要語「卒す」や、その対となっている「存す」の意味を理解するだけでなく、それぞれが該当する人物について捉える力が求められる良問である。

問6 傍線部の内容説明の問題である。注9を踏まえて本文を読むと、「魯の義姑」が「自分の子を捨てて兄の子を助けた」ということが分かる。

問7 傍線部の内容説明の問題である。正答を導き出すためには、1行目まで振り返る必要があるため、根拠を見落とした受験者もいたと思われる。本文の要旨を確認させる非常に適切な設問であった。

3 試験問題の分量・程度等

(1) 分量について

試験問題の本文の字数（漢文以外は文字数×行数）を過去2年間と比較すると次のようになる。

	平成29年度	平成30年度	平成31年度
第1問 評論	約4,500字	約4,500字	約4,700字
第2問 小説	約5,700字	約5,900字	約5,600字
第3問 古文	約1,500字	約1,300字	約1,700字
第4問 漢文	198字	187字	185字

(2) 設問数について

制限時間80分に対して大問は4問で、大問ごとの設問数は第1問～第3問で各6問ずつ、第4問のみ7問であった。全体の解答数は昨年度と同じ36であった。

(3) 難易度について

第1問の難易度は、昨年度と比較するとやや易しい。高等学校の授業で扱う評論文として文章レベルは妥当であった。設問についても、学習指導要領や日頃の学習活動の実態を踏まえており、お

おむね適切なものであったと評価できる。

第2問は、文章量、設問の難易度ともに妥当であった。場面設定が昭和（戦前）であったが、読みやすく基本的な読解力を判定する上で適切な設問であった。やや選択肢の絞り込みが難しい設問も見られたが、本文をしっかりと理解し選択肢との照合を丹念に行うことで正答を選ぶことができたため、日々の学習の積み重ねが如実に得点に反映したと思われる。

第3問は、古文の学習成果を見るに当たり、適切な難易度であった。敬語を含めた基本的な古典単語の力があれば、解釈は比較的容易であった。

第4問は、文章量、設問の難易度ともに適切であった。

全体的には、難易度は妥当であった。

4 試験問題の表現・形式等

(1) 表現について

昨年度と同様に第1問の問6においては(i)「適当でないもの」(ii)「適当なもの」となっていたが、国語全体の難易度が適切で、時間的な余裕があったため、今年度は受験者の混乱を招かなかったのではないかとと思われる。

(2) 配点について

各大問を50点満点とする配点に変化はない。解答一つ当たりの最低点は2点、最高点は8点であり、設問の内容に見合った配点がなされていた。

(3) 形式について

第1問の問5で出題された形式は、学習指導要領に基づいた「C 読むこと」と「A 話すこと・聞くこと」とについて、相互に密接な関連を図る言語活動が目指されており評価できる。ただし、結果的に従来型の本文正誤問題と同じようになっているため改善を求めたい。昨年度の第1問の問3のように形式を工夫していただきたい。

第1問の問6、第2問の問6では、例年同様の表現・構成を問う問題が出題され、段落や行の指定など、受験者の負担を軽減する配慮が見られた。

問い方や選択肢にも受験者の読解を助ける工夫が見られ、リード文や注釈についても適切な配慮がなされていた。

5 要 約（意見・要望・提案等）

本年度の平均点は、121.55点で、昨年度の104.68点より16.87点上がった。受験者は516,858人で、昨年度より7,866人の減となった。毎年50万人以上の受験者がいるセンター試験が、高等学校の授業に与える影響はきわめて大きい。本年度の結果を踏まえ、来年度が最後となるセンター試験においても良質な問題を作成する上で参考とされることを期待し、意見・要望等を以下に示す。

(1) 「国語総合」の枠の中で学習指導要領に沿った問題作成がなされていた。第1問の「対話的な学び」を踏まえた設問は、昨年度の本試験のような工夫をしていただきたい。今後も基礎基本を重視しながら、文章全体を理解することや思考することの重要性に目を向けさせる設問の作成を望む。

(2) 第1問の本文の文字数が適量であり、問題そのものの難易度と解答に要する時間とのバランスについても十分考慮されていた。解答に際して過度の時間的負担がかからないよう次年度も工夫をしていただきたい。

(3) 第2問の小説問題で、選択肢の照合に手間取る内容が減った。次年度もそのような点を考慮しつつ、読解力そのものを計る設問・選択肢群の作成がなされることを期待したい。

来年度はいよいよ最後のセンター試験となるが、今年度と同程度の難易度の試験を望む。